

濱のつぶやき『花吹雪』

紙やコインの裏表が一体であるように、陰と陽はどちらが良くてどちらが悪いということではなく、必ず両者一体のものである。

春。卒業式と入学式が続く。出逢いと別れもまた、そのようなものかも知れない。

先日、ふと目にした報道に釘付けとなった。

福井の予備校が二十四時間開いているという。いつでも好きな時間に、時には徹夜で勉強する受験生のために、始めたという。

ところが取材はそこで終わらない。カメラは突然夜の繁華街を映す。スナックで働く二十歳の女性。彼女は、看護師になるのが夢だという。が、幼い頃両親が離婚。母親と二人暮らしを始めたが、高校一年のとき、母親までもが失踪。身寄りが無くなった彼女は以来、独りで生きてきた。

生活費を稼がねばならないため、高校は中退。学歴は中卒となる。現代日本で中卒女性の働き口は、ほぼ皆無。コンビニ店員では、家賃・水道光熱費を支払っておしまい。ご飯に塩をかけて食べた事もあったという。

十八歳を超え、繁華街で働いてようやく夢を実現するための資金を溜め始めることができた。引き換えに、昼夜働く彼女からは、学ぶ時間と場所が遠のいた。

件の予備校は、彼女のような事情を抱えて高校を中退せざるを得なくなった若者に、高校卒業の資格を取る支援機関にもなっている。

弱冠十六の娘が、たった一人で生きてゆくのは、どれほど厳しく冷たい風に晒されたことだろう。世界でも経済的には豊かなはずのこの国で、寂しいという気持ちをこれほど過酷に突きつけられることはないだろう。画面に映る彼女の笑顔は、それにも関わらず屈託がなかった。

看護師への道は、未だ遠いかもしれない。が、これほどの経験を積んだからこそ、夢が叶ったその時、現場で立派な活躍をするに違いない。

予備校の二十四時間化。「度が過ぎたサービス・受験競争の過熱化」などという安直な批評を超越し、今日のニッポンの実情を、それは浮かび上がらせている。

春。出逢いと別れが交錯する頃。

この季節、風に舞う花びらは、幸多かれと「ひと」を静かに応援しているのかもしれない。



東北地方太平洋沖大震災で、お亡くなりになられた方のご冥福を謹んでお祈り申し上げますとともに、すべての被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

編集室から

「その時」は、東北・関東出張から金沢に戻ってきた直後でした。あの不快な長い揺れは忘れられません。悲惨な映像とともに、ネットには感動的な逸話が集り、何度泣いたか判りません。世界が、同じ国民が、現場で支えあっている人々の心に感動し、寄り添っています。

今月号は、仙台で勤務中に被災された同業の木村さんにご快諾を頂き、紙面を大幅に変更してお届けします。

大災害を前に、一人ができることは限られています。が、一人一人の想いを集めるしか、被災地を応援することができない...。非被災地は、応援できる体力が必要...。阪神淡路大震災以降、数々の災害で何度も学んだことです。

北陸でも、関連キャンセルが続出していますが、被災地の蔵元の地酒を呑もうという「呑みボラ」など、できることが始められています。

今回は、被災経験が薄れていた首都圏が少なからぬ影響を受けています。買占め・脱出・自粛...の一方で、在京の東北各県のアンテナショップでは応援の買い物行列！やれる事は何か...。皆で考え、乗り切りましょう！！(は)

2011/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2011/04
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

卯月



木々の新芽：能登・薬師の里にて
by hama

負けるな東北！
がんばろう日本！

被災地応援に逆効果の
過剰自粛は、再考を！

寄稿『東北地方太平洋沖地震 ―被災地からの報告―』

(財)東北活性化研究センター 主任研究員 木村 和也

まずは、今回の震災でお亡くなりになられた方にお悔やみ申し上げるとともに、被災された方にお見舞い申し上げます。

仙台市在住の私はこれまで、宮城県沖地震(一九七八年)や三陸南地震、宮城県北部地震(いずれも二〇〇三年)、岩手・宮城内陸地震(二〇〇八年)といった比較的大きな地震を、直接間接に経験してきたが、今回はそれらをはるかに上回る戦後最悪の震災であった。

仙台市では、仙台港近くの都市ガス精製工場(復旧まで数カ月かかる見通し)や下水処理施設、あるいは地下鉄の高架橋や駅等の一部が損壊し、しばらくの間、市民生活への影響が避けられない事態となっているが、それ以上に岩手・宮城の三陸沿岸地域や仙台市宮城野区及び若林区の沿岸部などにおける、津波による被害が甚大であった。

今回の震災の特徴として、地震による建物倒壊よりも、津波による被害と停電による生活や経済活動が麻痺したことに加え、これらに起因する原発事故発生の三つが挙げられる。

とりわけ、震源域が青森県から千葉県に至る広範囲にわたり、かつ想定を超える大津波により、過去の経験から防災意識の強かった地域(南三陸町志津川等)でも、十メートルを超える想定外の大津波には対処しようがなかったという事に尽きる。被災地域の大半は沿岸部で、携帯基地局の多くも被害を受けたため通信手段も寸断されてしまった。加えて、内陸部と被災地を結ぶ陸上ルートは比較的早くに復旧したものの、被災地内の各避難所を結ぶルートは、燃油不足から重機による瓦礫撤去が進まず、避難所の一部が孤立したり、暖房や救援物資の搬入がままならないといった事象が起きた。

具体的ケースを紹介すると、津波により市街地が全滅した岩手県陸前高田市では、二百年以上にわたって醤油や味噌を製造してきた老舗企業の八木澤商店が、今回の地震・津波によって店舗・工場が瓦礫の山と化してしまった。同社は、岩手県産の大豆や小麦を使った「生揚醤油」や市近郊の大豆やコメを使った「おらほの味噌」などで全国に根強いファンがいる。そして、同社八代目の河野和義さんは全国太鼓フェスティバルの開催や地元学の推進に尽力するなど、まちづくりのリーダーとしても知られていた。

同じく津波の被害を受けた宮城県気仙沼市では、唐桑町で力キ養殖業を営む畠山重篤さんが養殖施設や所有する船を失った。畠山さんは、気仙沼

湾に注ぐ大川上流の岩手県一関市室根町で賛同者とともに、毎年広葉樹の植樹を行っており「森は海の恋人」運動として全国にも知られている。

このように、自然の猛威、未曾有の事態に人間は無力であることと併せ、電池式ラジオや反射式ストープなどアナログ製品のありがたさを改めて痛感した出来事でもあった。

もう一つの特徴として、東京電力福島第一原子力発電所の事故・停止により、首都圏の生活や経済活動にまで影響が及んだことも挙げられる(二〇〇七年の新潟県中越沖地震の際は、東京電力柏崎刈羽原子力発電所に影響があり、原発の安全対策が問題視されたものの、首都圏への影響は今回ほどではなかった)。

そのほか、東北新幹線も架線や高架橋、仙台駅ホーム等の損壊により復旧の見通しは立っていないことから、新青森までの全線開業はやむばさの運行開始を契機とした地域活性化への期待に水を差してしまった。また、自動車メーカーをはじめ、いくつかの生産拠点でも復旧の目途が立っていない。

今後は、国民一人ひとりが被災地の惨状と住民の悲しみ、痛みを思いをいたし、支えあいながら、一日でも早く復興することを願うばかりである。

一方、今回の震災を通して垣間見たことをいくつか指摘しておきたい。

良い面として、国内外からの救助隊派遣、全国各地からの義援金及び物資援助など暖かい支援が寄せられたり、被災地住民自らが復興に向けた一歩を踏み出す姿がみられた。感謝の気持ちとともに、心強いかぎりである。

その反面、新聞やテレビ等で全国に報道されているので詳細は割愛するが、首都圏民の過剰反応や原発事故の放射線漏れによる風評被害も起きている。

こうした事象は、これまでも何度となく指摘されており、日本人の行動特性として変えようのないことかもしれないが、まずは国民一人ひとりが、被災地の惨状と住民の悲しみ、痛みを思いをいたすことではないか。そして、自分には何ができるかを適切に判断し、冷静な行動を取ることが大切である。そのことを肝に銘じ、学習していかなければならない。

【プロフィール】

(きむら かずや)一九六八年生まれ。一九九二年四月、(財)東北開発研究センター(現

(財)東北活性化研究センター)入所、現在に至る。これまで、東北地域の活力向上と持続的発展に向けた様々な分野の調査・研究に従事。



きただより47 弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『東北関東大震災によせて～テレビの災害報道で感じたこと』

平成23年3月11日、このたびの大震災は起きた。学生時代を仙台で過ごし、調査や仕事を通してこれらの県の多くの地域を巡ってきた筆者としては、連日、岩手、宮城、福島3県をはじめとする厳しい状況に涙しない日がない。秋田県は奥羽山脈の向こうが大変なことになっているなかで、幸い亡くなった方もなく概ね平穏であるが何か心苦しい落ち着かない日々を送っている。今回は私が感じたテレビの災害報道について述べたい。

さて、私の家では地震で電気が止まった。携帯電話の電池量が残り少なくネットのアクセスを控えたため、頼りの情報源はラジオのみであった。電気のない家でラジオを聴き一晩を過ごした。翌12日朝、宅配された地元紙の特別版1面は仙台市若林区荒浜の津波写真に絶句した。そして夜6時前に電気が復旧し、すぐにテレビをつけるとNHKで映していたのは釜石市の津波映像であった。何度もこの映像は流れているが、最初に見た衝撃はおそらく忘れられないであろう。他の民放も当然、震災報道一色で、それまでラジオのみの情報から一気に情報の洪水に見舞われた。13日の日曜日までは、民放各局も震災報道一色であったと記憶している。

しかし、14日の月曜日以降、民放は震災報道の放送時間はどんどん短くなり通常のニュース枠のみになっていく。ワイドショーなどでは震災をとりあげ、悲しみにくれる被災者への容赦ないインタビュー、くどい抽象的な質問を浴びせ相変わらず過激な取材に数多く目にした。東京のキー局Nではレポーターの暴言、キー局Fでは菅総理の会見に対して放送スタッフが嘲笑した会話が流れるなど考えられない不愉快ことが起きた。そして、最近のワイドショーやトーク番組の類であるが、大勢の素人タレント等のコメンテーターを並べてしゃべらせる。そのようなコメントなどを流している時間が惜しいと感じた(日常の番組でも同様である)。

被災地はもちろん、他の地域においても、とにかく一刻も早く正確な情報が欲しいときに何を放送しているのかと思う。青森は、岩手は、宮城は、また各市町村は一体、どうなっているのか。電話、メールが一切通じないなか、自分の故郷の様子や、家族、知人の安否など少しでも情報を得たいものである。NHKではテレビ、ラジオを通して安否情報を流しているが、民放各局はもっと「被災地、被災者の側に立った情報提供」に軸を置いて欲しいと思う。

また、報道される地域にも偏りが見られる。もちろん、交通が不通で行けなかった、通信網も寸断され情報が得られなかったという面は承知しているが、地震から1週間ほどは、テレビ映像では海岸部でも報道がほとんどなかった町村もあり、また、海岸部の津波被害の報道に比較し、内陸部の被災地である宮城県の角田市、福島市や郡山市の中通り地方などの様子の取り上げが極端に少なかったように思う。

災害時のテレビ報道体制として、NHKを軸として主な民放キー局4局で災害時に地域割など役割分担ができないものか。各局とも番組毎に取材に入っており、相当数の報道陣が被災地に入っているだろう。報道が救援等の妨げになっている場合もあるようにも聞く。被災地に入る報道陣の総量規制も必要なのではないかを感じる。

テレビの災害報道に批判的なことを述べてきたが、テレビ局の報道のあり方や役割分担など、これも重要な危機管理体制のひとつと考えるが故である。

『都市生活について』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

東北関東大震災からおよそ2週間が過ぎようとしている今日、この原稿を書いています。震災の犠牲者は死者・不明者が2万2千人を超えました。まさに未曾有の大災害です。亡くなられた方のご冥福を祈るとともに、東北の方々の生活が早く日常に戻ることを願っております。

今回は東京に住み生活をする立場から、今後の『都市生活』について私見を述べさせていただきたいと思います。3月11日(金)の当日、私は経営する能登の郷土料理屋『能登の夜市』を前日にオープンさせ、恵比寿にあるKinkosで店舗POPを出力している最中でした。お店の破損・損壊はなかったものの、当日は東京への出張で帰れなくなったお客様が数組訪れたくらいでした。私も従業員も家族が心配でしたので、23時にはお店を閉めて帰ろうとした矢先、自宅に帰る術がないではないですか。お店の前の目黒通りは車で大渋滞、歩道には急ぎ足で駅とは逆方向に向かう多くの人々。仕入の関係で車で通勤している私は通常20分程度の帰り道が約3時間。店長、板前さんに至っては徒歩で約4時間かけて自宅に戻りました。

東京と言えば数分に一本の間隔で電車がホームに到着し、網の目状に張り巡らされた地下鉄に乗れば複数の経路で目的地に到着できる、驚くほど公共交通インフラが整備された都市です。しかし、東北を震源地として地震ですべての交通インフラが全停止してしまうなんて今回の地震の凄まじさを実感するとともに、都市生活への不安がよぎりました。農産物、水産物の消費地でしかない東京と生産地の地方が分断されたら果たして首都圏の数千万人はどうやって生活していくのだろうか?買い溜め現象が起きていますが家庭個々での備蓄なんて持って1週間程度。東京という都市の在り方そのものが果たして持続可能性を持つのか?ということ問われている気がしてなりません。そして、東京に住む私たちも問われているのです。『何が私たちにとっての人間らしい生活であり幸せなのか』を。前述した食料に関する問題は一端でしかありません。それによって引き起こるであろう人の欲望の暴走など想像するだけでおぞましい光景が目に見えます。

今の生活スタイルをすべて転換するのは現実的に難しいでしょう。ネットはすでに生活インフラになってますし、東京という世界トップの経済圏での仕事や生活は本当に魅力的です。ただ、私たちの生きていく上での多くのものは地方や海外に大きく依存しているという現実を直視しなければいけません。

震災の翌日私の母親から電話がうちのかみさんにありました。

『能登で、みんな楽しく農業して暮らしましょうよ』

それも素敵な生き方です。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 宮城県丸森町 冬のたび』

平成23年2月4~5日 静岡県職員 溝口 久

昼食は「ひっぼもりのレストラン」に用意されていた。丸森の町中から離れ、標高400m程の筆甫（ひっぼ）という集落に入ると田んぼは一面雪景色。目的なくして来る事はまずないだろうと思うその地にレストランはある。オーナー金森正子さんの本業は林業、伐採や運搬の仕事をバックホウ、ブルドーザーを操り男勝りに山仕事をこなす。その彼女が心機一転、地域のために何か自分にできることはないか？と林業はご主人と息子に任せ「地元の素晴らしい食材と郷土料理の伝承」を目的にふんだんに地元材を使ったログハウス型の農家レストランを平成15年に開業。フードコーディネーターのアドバイス、地元農家からの食材の提供を受け、今年年間4000人ほどの来客があり、娘さんらが一緒に働いている。



「へそ大根の煮しめ」「ササギの佃煮」「キノコのでんぷら」に混じって、驚くことに干し柿が揚げられていた。さくっとした食感が命のでんぷらには天つゆよりも塩がいい、この時出された塩が黒い。聞くところによると「竹炭の粉末が混ざっている」とのこと。他にも豆に竹炭をコーティングした名物菓子もある。土産にこの塩を持たせてくれたので、我が家のふきのとうをてんぷらにした時に是非使おう。さらに、地元や最豊富のレトルトの「あくだもだカレー」も商品化され売られている。

今や食材王国みやぎ「いきいきレディ」、仙南食材拡大フェアコンクール最優秀賞、食アメニティコンテストで会長賞受賞と勢いが続いている。「地域とのつながりが深まり、目配りできるようになり、そして地域が育んできた農業技術、生活の知恵を活かして、高齢集落を元気にしたい」と女性企業家は明日を語ってくれた。

ここ筆甫（ひっぼ）の地区振興協議会が毎月発行している「筆甫ふるさとだより」が素晴らしい。12ページからなり、表紙を“筆甫百景”その月の代表的風景が飾り、めくると振興会長の「あきらめないのが大事」で地区別計画の推進について語っている。リレートークでは住民が主役となり、かつての暮らしぶりや今のまちに対する想いが取材されている。なんでも情報局コーナーにある「食文化を堪能する会より 郷土料理・自慢料理試食会」が大いに気になった。800人あまりのちっちゃなムラで繰り広げられている真剣なまちづくりに、ちょっと目頭が熱くなった。

この夜は国民宿舎あぶくま荘に泊。役場の面々が集まってくれ、佐藤副町長お手製のどぶろくをたらふくいただきながら、丸森の郷土料理を次々に平らげた。「次は浜松へ」と渡辺前町長が3月に、佐藤副町長が4月に来ることが酔った勢いもあってあっさり決まった。

どんなもてなしができるか、酔った頭の中をいろんな場面が廻っているうちに深い眠りについた。その間に、生きていどぶろくは一升瓶の栓を飛ばし、ペットボトルをはちきれんばかりに膨らませた。丸森のみんなの勢いを表わすかのように

ね。

翌日は、お楽しみのかたつ舟だ。午後から山形県上山市に向かうに当たり、我々を迎えに来てくれた上山市役所の山口さんも出航に間に合った。昨年2月に、岩手県一関市にある「猯鼻溪」を巨岩絶壁が連なる雪降りしきる溪谷を船頭さんの漕ぐかたつ舟に乗った。かたつに足を入れちびりちびりやる酒に、舟のゆるりとした速さで移りゆく水墨画のような風景に見とれた。



そのイメージで丸森町の阿武隈ラインのかたつ舟に乗り込む、積雪はところどころで、一面雪の世界の猯鼻溪とは違う、船頭が櫓をこぎながら民謡を唄い情調あふれるところがないのは残念だが、ここには味噌仕立ての熱々のしし鍋に、昨晚の残りのどぶろくもある。寿司屋が作り出前するしし鍋は確かに美味しい、どぶろくの呑みも自然に進む、ゆるる舟に身も心も揺らぎ、阿武隈川にもたれる心地よい一時間であった。

その時、船頭がその寿司屋ではサンショウウオの寿司を出していると言うではないか！コブラも食したことがある浜松にある大手惣菜会社社長の知久さんがすぐに反応した。「そ、その寿司屋に行こう！」



金八寿司にそのサンショウウオの寿司があった。昼食時間帯はどうに過ぎ、人気はない店に入り込み、女将に頼んでみると「しゃりがなくて寿司にはできないけど、出すことはできる」とのこと。さて、出されてきたサンショウウオは雄メス10匹ほど、長さ20センチ弱。もちろん天然記念物のオオサンショウウオの類ではない。冷凍から戻して、揚げて食べるらしい。テーブルの上には、グルメ漫画「美味しんぼ」が置いてあり、この店のサンショウウオの寿司の場面が出てくる。「鼻血が出て知らないよー」と言われ、ホンマかいな？と揚げて出されてきたそのブツを口にした。味が説明できるほどの濃厚なものでない、同じ両生類のカエルを揚げたようなものかもしれない。翌朝に谷岡やすじの漫画状態には残念ながらならなかった。

サンショウウオよりもこの店の名物はイノシシ料理にある。季節ごとに具を変えるイノシシ丼はこの自慢メニューだ。驚くことにイノシシの熟れ寿司も作るという。2ヶ月前に予約が必要で、予約が入ってから仕込むと言う。これを聞いた知久さんが、「今回丸森に来たくても来る事ができなかった仲間を連れてくるからよろしく」と再訪を宣言していた。

丸森の春は特に美しい。雑木が多く新芽を吹いた木々に覆われた山々は正に“山笑う”姿になる。山菜も豊富だ。できれば5月早々にでも再来したい、ならば3月にはイノシシを予約しないと。お楽しみは続くけど、待っていてはくれない。

副町長がつくった赤い花のそば粉に、前町長の“自信作”と書かれたお米、ずっと案内してくれた木幡さんからは香りを引き立たせるお米、土産に買った大紫蘇の千枚漬け、へそ大根、あんぼ柿、ずっしりと重くなったリックを背に、手にはどぶろくの一升瓶を持って、次の地山形県上山市を目指した。山形県に入ると、真っ白な銀世界。そこには8年ぶりに会う懐かしいみんなが待っていてくれる。お楽しみはまだまだ続く。（おしまい）